

綾瀬市立寺尾小学校

研究テーマ：『主体的に向き合い、ともに学ぶ子』

～互いを認め合い、よさを感じながら学びをつくる授業を通して～

1 実践の目的

本校の児童は素直でどの学習も意欲的に取り組むとともに、新たな学習課題に対しても、前向きな気持ちを持って学習に臨んでいる児童が多い。地域特性から様々な国とつながりをもつ児童もあり、言語や文化などが違う多様な他者に対しても、それを受け入れながら、ともに過ごそうとする姿も見られる。また、昨年度児童に対し実施した意識調査では、多くの児童が友達との学び合いの大切さについて肯定的に回答していることから、他者と協力して学ぶことの意義、そのよさを感じている児童も一定数いることが窺える。

しかし、他者と学ぶことがよりよい学びにつながることは分かっているにもかかわらず、自分の考えの根拠を明確にして述べたり、順序立てて話したりするといった、言語を用いた表現に課題が見られるため、自分の考えを正しく相手に伝えられず、それが自己肯定感の低さにも表れており、結果、「受け身」の学習者となってしまっていることにもつながっている。

以上のことから、本校の学校教育目標

『心豊かでたくましくねばり強い寺尾の子～すなおで かしく たくましく～』の実現に向けて、学校として育てたい資質・能力を、「言葉を使って、自分の気持ちや考えを伝え、理解し合う力」「対話を通して、いろいろな見方で考える力」「自分に合った目標を持ち、それに向けて努力することができる力」と設定した。特に学習面に関してこの3つの資質・能力を育成する

ために、研究主題を「主体的に向き合い、ともに学ぶ子」として研究を通して目指す児童像とし、主題に迫っていくための視点として副主題の「互いを認め合い、よさを感じながら学びをつくる授業を通して」を設定し研究を行っていくこととした。

2 実践の内容

(1) 互いを認め合える学級風土づくり

すべての児童が学習を通してよさを感じたり、自ら学びを作っていこうとしたりするには、「自分の考えが認めてもらえる」「安心して学習に臨める」と実感できる学級風土を作っていくことが欠かせない要素となる。そのためには、校内研の取組だけではなく、本校の道徳教育における重点項目である「親切、思いやり」「相互理解、寛容」「希望と勇気、努力と強い意志」を意識した学級経営、また、カリキュラムマネジメント会議で挙げられた本校の児童の実態等を理解し、実態にあった指導を行っていくことが必要である。「授業で学級を作る」という意識を持って、教師は児童に細かな声掛けを行い、授業の中でのあたたかな人間関係を育んでいくことで、学び合い、高め合う学級を作っていきたいと考えている。

(2) 「よさ」を感じながら学びをつくる授業づくり

「よさ」とは、自分・相手・教材・学習活動など、多様なものを含んでいる。児童は学習の中で様々な「よさ」と出会う機会がある。しかし、学習へ向かう態度が「受け身」の状態では、その「よさ」を感じず、「やらされて

いる」学習になってしまう。そんな「受け身」の状態から脱し、より主体的な学び手になっていくための視点が「学びをつくる」である。指示されたことだけでなく、自ら問いを持ったり、学習の仕方を自ら考えたりするなど、子どもたちが自分の力でつくろうとする態度を養うことを狙いとしている。そうしてより主体的に学習に臨んでいく中で「自分の出した問いが誰かににとって価値のあるものになった」「自分では考えられなかったことが、友達の考えを聞いて分かるようになった」「一見難しそうだけど、前に学習したことを生かせるかもしれない」といった、「よさ」に気づく。この「よさ」を感じることで、自己有用感、他者理解が深まり「主体的に向き合い、ともに学ぶ子」の育成につながっていくと考える。また、児童がより主体的な学び手となるための具体的な手立てとして、

(Ⅰ) 考えるツール

(Ⅱ) きく・話す段階表

を活用した授業づくりに、全学級で取り組んでいる。

(3) 授業スタイルの共通化（振り返りを通して）

「あやせ授業モデル」「あやせノートモデル」を活用するとともに、特に「考えを広げる・深める」段階では、児童同士が積極的に関わり合い、伝え合い、学び合う場や時間を設定した。児童が「自分の言葉で話す」「友達の言葉を聞いて考えが深まっていく」過程を大切にすることで、児童の中に実感を伴った「わかった」「できた」が生まれるようになってきた。また、振り返りを充実させ、できるだけ自分の言葉で、「何がわかったか」「なぜわかったか」を振り返らせることに努めた。単元の中でいつ、どのように振り返りをさせるかを考える事が、単元計画を練ること、教材研究にもつながっていくと考えている。

3 実践の成果と課題

(1) 成果

すべての授業の土台となる「学級風土」をしっかりと作っていくことを研究の中心に据え、授業と学級づくりを切り離さずに研究を進めたことで、「授業で学級を作る」という意識が教員の中に根付き、授業づくり、教材研究を核とした校内研究自体が充実したと感じる。「考えるツール」や「きく・話す段階表」の活用の仕方については難しさを感じている教員も少なくはないが、児童の実態に沿った活用の仕方を今後も研究していきたいという前向きな意見が多く見られた。全職員で目指す児童の姿を共有し、その実現に向けて取り組むことのできた1年間だったと感じている。

(2) 課題

年2回実施「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業に係る児童アンケート」の中の「授業の終わりには、学習したことを振り返り、自分の言葉で書くことができますか」の項目について、6月は9割近くの児童が肯定的な回答をしていたのに対し、1月実施のアンケートでは6割強に減少していた。振り返りのさせ方についてはこれからも学校全体で共通理解を図るほか、児童の「わかった」「できた」につながる振り返らせ方を模索していく必要があると感じている。

4 今後の展開

次年度も研究テーマ及び副主題は継続とし、引き続き児童が「よさ」を感じながら主体的に学びをつくる授業づくり、授業改善に取り組みたい。特に授業における「振り返り」に重点を置き、単元計画の中に振り返りをどう位置付けていくかを考えていくとともに、児童にとって実感を伴う振り返りとなるよう研究を深めていきたい。